

耆(ぼ)う)

くタナトスの抱擁く

馬場駿

かなりオープンな家の造りだ、陽が昇る方向に細長い縁側があり、ガラス戸が外の世界との境になつていゝ。雨戸を毎度開け閉めすればそれほど無防備とは言えないが、昨日の兄の話では台風でも来ない限りガラス戸のままらしい。そのガラス戸を両端に寄せて縁側に座り、足をぶらぶらさせながら眼下に見える数戸の茅葺屋根を見ていた。もう少して九時になるというのに兄が起きてくる心配はない。一日二食の生活で朝食は十時頃摂つていゝという。突然訪ねてきた招かれざる客の身で異を唱へるほど非常識でも我が儘でもないで、時間を持て余しながら風流人を気取つていゝ。空気が冷たくて甘い。思い切り吐いた息が一瞬白くなる程度の寒さが、長距離運転と真夜中まで続けた会話の疲れを癒してくれらる。いや、肩を窄め、ただ固まつていゝだけの緊張感、そうなのかもしれない。一直線の崖側いっばいに咲いていゝ菊の香りが柔な風に乘

つて迫つてくる。彼らは人の世話で綺麗に姿を整えられ取り澄ました輩ではない。赤、白、黄、薄緑と花の色も形もまちまちで背丈もばらばら、ひたすら仲間とせめぎ合つていゝ野生に近い。それなのに中には、見ず知らずの雑草を抱きかかえていゝ奴もいゝ。なんとも好もしく微笑みを返したくなる。真正面に見える山の頂の横に顔を出した太陽が眩しい。一分ほど耐えたがたまらずに瞬き、仰向けになつて縁側に背中を付けていゝ。すると突然目の前に、白髪に加へ無精髭で頬がこけていゝ兄の顔がヌツと現れた。かなり近い。「おはよう」の挨拶で顔をどけてもらい、腹筋力で姿勢を正した。

「チンしたライスにレトルトカレーでいいか」

「ちよつと朝だよ、何かつくろうか、わたし」

「無理だ、食材がない、我慢しろ」

「いつもなの？」と立ち上がった。

二人の背丈の差が半端ではない。傘寿の人の世界では化け物に近いと言へるだろう。育ち盛りが戦時で食糧難、戦後も家が赤貧洗うが如しで、とにかく栄養不足だったと昨夜古びた愚痴を聞いたばかりなのだ。

「朝も夜もない、いつも食うのは即席だ」

兄の返しは不機嫌丸出だった。

「分かった、わたしやるから」

「もう済んでるよ、食うぞ」

朝食の支度を窺わせる音はしなかった。気配を消せる人なのか兄はと、うなずきながらそんなことを思った。

朝食後、兄を助手席に乗せて買い出しに出掛けた。

兄によれば一番近いスーパーでも片道十五キロはある。七十五歳の時に交通事故を起こして運転免許を返納し車を廃したとのことで、以来ネット通販で保存食品ばかりを購入しているという。

「事故って対物？」

「いや人身扱いになった、この集落の老人でね、軽傷で済んだからいいようなものの、老いて注意力が落ちた、運転するのが怖くなった」

そう言えば昨日、左折して一本道に入る場所を通りがかりの老人に三澄篤孝の家と名を告げるかたちで確認したときに微妙な薄笑いをされているが、原因は

その人身事故かもしれない。

「保存食ばかりなんで痩せ細っちゃったわけだ」

「いや…それは別だ。まあ、気にするな」

「うん。買い出しだけどこ何か食べたいものある？ つくって欲しいものとかも」

「朝めだけでもいいから、炊いた飯に野菜の味噌汁

それに沢庵とか白菜の漬物、出来れば干物もつけて」

「つまり昔の日本の朝食だ、了解！」

何とも小さな願いで、少し可哀想になってきた。

「ねえ、奥さんいつ頃亡くなったの、あ、それとも離婚かな」口にしてから悔いた、怒るかもしれない。

「死ぬも離婚もない、結婚歴はない」

「独身上主義、いまや流行りに近いものね、兄さんの雰囲気。ピッタリかも」

「ふん、そんな慰め方もあるのか。悦子、お前はよ

誰に頼まれたかは知らないけど、長いこと兄でも妹でもなかつた八十の老いばれに逢いに来て泊まれるなんて、旦那がいたら無理に決まってる」

「いたよ、夫は、私が四十のとき死んだ、心筋梗塞で

ね。それから十年間、育ててくれた養父の介護と養母

の看病に明け暮れてチャンス無し。遺産というあぶく銭もあつてさ、女独りで暮らせたし。まあ養父母の看護介護料の性格もあるから有難く金銭の遺産、頂戴したのよ。不動産しかもらえなかつた実の息子には罵倒されたけどね。五十からは長い蟄居の反動で羽が生えたようにぶつ飛んだ生活をしていまがある」

「まさか男狂い？ 体の方から言つても無理だろう」
兄はクシヤツと笑つて顔を覗く真似をした。

「四、五年で男はやめた。若い奴らと仕事するのが楽しくなつてね、いま小さな会社を創つてる。そのうち準備が出来たら連絡が来る」

「ここで兄は会話を切つた。視線を向けると苦い顔をしている。勘違いをしたらしい。気難しいと姉貴たちは言つていたが、むしろ解りやすい性格だと思つた。
「無心目的で来たなら帰れ、金はやらないし貸すのもお断りだ」

予想通りだった。

「さつき遺産のこと言つたよね、わたし。お金ならかなりあるのよ、残念でしたあ、予想は外れえ」と、半ばおどけて返した、バカにするなど怒つて、やつと築

いた兄妹らしい雰囲気を壊したくなかつた。

兄は小さく体を揺らして嘖き出し「悦子、お前、子どもっぽいな、もう六十五だろ」と言い、笑顔を引き摺つたままで続けた。「確かに、お前の養親の和田さんは豪邸もある金持ちだった。あいつらと一緒にして悪かつた。お前が養子に出されたとき俺は十五だつたから親父らの内証話を耳にしてそれは知つてた」

兄にとつては「あいつら」なんだと、姉たちとの仲の悪さはこれで確認できた。

その「あいつら」らに、直接的には長姉の花子に、兄のことで相談に乗つてくれと頼まれて集合場所たる次女咲枝宅を訪れたのだった。養親を一人とも亡くして独りになり、ようやく寂しさが増してきたこともあつて、姉妹の中に混ぜてくれたのが嬉しかつたのだ。
「若いわねえ、わたしより五つ年下つただけでしょ、妬けるわあ、秘訣でもあるの？ 恋してるとか」
挨拶抜きの子女の、のつけからの言葉は身内という

近しさの証だと感じられて嬉しかつた。

「小太りだからでしょ、皺が目立たないだけよ」とお

世辞を瞬時にかわした。本当は「よく言われる」とニヤついてみたかったのだが…。

「葉子、愚問だよ、悦ちゃんはお嬢さまで育ったんだよ！ 地べたを這いつくばって生きてきたわたしらとは違う。はい、座って、早く座る、初めての四姉妹の集い、乾杯しなくっちゃ」

この日の会合の主催者はどうやら花子ではなくこの咲枝らしい。それにしても「悦ちゃん」という呼び名の響きが嬉しくて眼がウルウルしてきた。

ワインで乾杯した後の雑談で三姉妹の現在の様子が少しは理解できた。

喜寿を迎えた花子は早くに夫を亡くし、後を継いだ五十になる息子夫婦と同居していて、すでに何事も自由にならない存在に墮している。そこへいくと後期高齢者の仲間入りをした咲枝は同じように夫を亡くしているのだが、独り娘は夫の実家に入っていて手許にはおらず、借家住いながら誰からも干渉されずに一人を謳歌している。同じ一人暮らしでも末の姉葉子の場合は悲惨で、独身を通してきて年金も僅か、いまは生活資金面でその報いを受けているらしい。わるいこと

に借りているのは都心のアパートで家賃が高く、時々支払いが滞ることもあるという。ただ、唯一いまだに賃金を得ていて、私立の施設の介護補助を「お情け延長」で続けられている。もちろん身分の安定はない。「お酒が回ったところで本題に入ろうか」と咲枝が咳を一つしてから言った。「悦ちゃんの所へは連絡がなかったかもしれないけど、篤孝兄貴のことであつちの福祉事務所から面倒な話があつたのよ」ここで花子と葉子が同時に、大きくうなずいた。

内容を知らないのは自分だけということのようだ。咲枝の話によれば、電話の相手は、福祉課の人で小松正義と、フルネームで名乗った。どこで調べたのかわからないが、一番若い葉子でも年長の花子でもなく住処が比較的広い咲枝のところに白羽の矢を立ててきた。冬が来る前に、八十になつて数種の疾患を抱えている篤孝を引き取つて万一の場合に心残りのないようにしてほしいとのこと、それは掛かりつけ医の要望であり警告でもあると付け加えたらしい。

「面倒なことを押し付けてきた割には大雑把だわね、死因になりそうな病気も言わずに？」と花子が演技色

丸出して台詞を吐いた。

「失明も視野に入る緑内障が一つ、これは両目だそう。それに肝臓癌、進行の段階は聞かないでも判るわね。心房細動もかなり気になるそうよ、とくに怖いのはこの三つだつて」

「全部やばいわね」と葉子は腕組みをしてみせた。シナリオでもありそうな合いの手を思わせるタイミングが微笑ましいレベルだ。

出てきた三種の疾患が、山間の集落に独り住む兄の死にも直結するほど危険だと彼女が理解できるのは素晴らしいが、それはその通りとして福祉課も無理な要請をして来たものだと思った。既に役所の求めに応じられる生活環境に居るのは咲枝一人なのだ。ただ、役所が事前に三人の生活環境を精査したうえで一人だけに要請をして来たとは思えない。通知というか連絡は全員に来たはずで、二人には脚色なしで事実をもっとぎつくばらんに話してもらいたいと思ひ、「わたしに何を求めたいかは想像できませんでした」とはつきりと斬りこんだ。

案の定、咲枝がビクツとして背筋を伸ばした。

「ですから飾らない情報をください。事實は姉さんたち全員に通知は来たんですよ。で、役所が具体的に求めているものが何かを、全員が把握している」と柔らかな眼で見回した。

花子が大きく息を吐いてから「ごめんね、悦子、わたしたちはあの兄に何もしてあげられないの、気持ち的にも経済的にも。うん、そうね、正直に言うんだつたわね、電話一つ掛けたくないし、顔も見たくない、一切かわりたくないの。だけど断つても役所の要請は何度も来る。三人とも疲れちゃつてさあ、……と応じると、咲子が「それで、身内つてもう一人いるじゃんてなつたわけ。悪いけど小松さんに電話して、最終的にどうのこうのじゃなくて、とりあえず、あいつのところへ行つてみてくれる」と拝む仕種をした。

「会えば向こうから拒絶してくれると思うのよ。そうすれば役所も責任果たせるし、こっちも」葉子も気楽な展望をして片頬で笑つた。

勝手な言い草だが一理あると思つた。自分自身で兄の考え、感じ方、人間性など確かめないで、感情的になつている姉たちから情報を得ても始まりはしない

のだ。そうと決まれば為すべき応えは一つだ。

「いいわ、福祉課へ電話も入れるし、兄さんを訪ねて会ってくる、電話すれば役所は住所も知ってるはずだから、カーナビだけでたどり着けるはずだし」

「ありがとう！」笑顔に転じた三人の声が重なった。

「ところで、急に私も妹ですって電話をしても福祉課が個人情報住所を漏らすわけがないので、わたし、咲枝姉さんに先に電話を入れてもらって、その場で私を紹介してもらわないと」

「それじゃあ、たぶんだメ。わたし住所は知ってる」咲枝の言葉に二人が「ええっ！」と声を揃えた。これは演技ではなく本当に初耳なのだと感じた。

「ごめんね、黙ってて。小松さんとの話の流れで住所を教えてもらおう羽目になってさ。悦ちゃん、いま教えるから」と立ち上がった。

「そりゃそうだわ、知ってるってだけでやばいものね、場所が分からなくて、なんて逃げられないし」

葉子が立場を悪くする無用な発言をした。

「でも、どうしてそんなに嫌うのかしら。それは聞いておきたいと思う」

「はい、これ住所。小松さんのケータイ番号も書いてあるメモだから」と咲枝。

「公務員が個人のケータイのもの？」福祉課がどれほど彼女に期待を寄せていたかが分かる。

「二十八のときだったかな、同棲していた男に追い出されてさ、お金は無いし住むとこ無いし途方に暮れて当時かなり稼いでいたあいつに助けて、お金貰ってって頼みこんだのよ、だって長男でしよ、甘えたのよ、それがね、涙流して頼んでるのに、断る、帰れ！絶対忘れないわよ、あの扱われ方」と葉子が真っ先に応えてくれた。

「そのときでしよ、あんたが危ない水商売に就いたの」「ちよつと咲ちゃん、もう少し言葉を選んでくれる」「妙なやり方で仇とったんでしよ、三十年ぐらい前に」
花子が横に居る咲枝を突きながら言った。

「そうよ、あの春画のプレゼント」と葉子が笑って応えて、昔を振り返った。それによれば当時好い仲だった男が画家もどきで、その彼氏に性交場面をリアルに描いてもらい兄の五十歳の誕生日に郵送したという。贈る言葉が「未だ女を知らない兄さんに」とかなり残

酷な揶揄だったらしい。

「わたしの場合は家を借りる時に保証人になってと頼んだときのあいつの台詞かな。何か頼むときだけの妹なんて要らねえよ、帰れ！ 絶対忘れない」と、咲枝は手許のビールを飲み干して唇を囁んだ。

「ごめん、もういいよ、わたしにも嫌な経験あるけどさ、悦子に頼み事してるんだから。露骨すぎる」

花子がわたしに謝罪の視線を送りながら締めた。

血のつながった兄弟姉妹という人間関係に或る種の憧れを抱いていたのだが、現実はかなり違うようだと、姉たちに訊いた自分の方を悔いた。

段ボール三箱の買い物をして戻り、キッチンで食料品を保存の仕方で振り分けていると、兄が小さく笑いながら「お前、いつまでいる気だ」と言った。

これも、受け取り方では、早く帰れよ、図々しいとか、迷惑だと解釈できるだろう。しかしわたしは、声音で判断した、きつと嬉しいはずだと。

「居られる間」と笑顔を送った。

「学のあるやつはさすがだな、いろいろな受け取り方

が出来る言葉をサラッと返してくる」

「今日かもしれないし、ひと月居るかも。仲間から連絡が入ればすぐに東京に戻るけど、なければ出来るだけ長く。実の兄さんと暮らすの、初めてだしさ」

めいっぽい笑顔を送った。演技ではない、出した言葉も掛け値なしの本音だった。

「好きにしろ、食う仕度が無くて楽でいい。その分蓄えの金も減らない」

「どうやら真っ直ぐに気持ちを出せない性格らしい。

「今日の夜は何だ？ お手伝いさん」

「すき焼き、牛肉の質が予想と違つて良かったから」

「山の中でも牛は飼(買)えるさ」

「今のうまい！ 座布団一枚」

「これでは整理が進まないよ、思わず笑つた。

「悦子、お茶にしないか。お前、ずっと動きっぱなしじゃないか」

確かにこの家に辿り着くまでの間だけでも三時間は運転している。兄が発した「お前」の声音が優しい。着いて玄關に立ったときの第一声「誰だ、お前」とは雲泥の差がある。

「ありがとう。で？　ほんどのお茶でいいの」

「そうだな、少し早いけど麦から造った泡のたつやつにするか」

「ケースで買ったからまだ冷えてないけど」

実は元々念頭に置いていたのは日本酒だったのだ。すると、兄が隅にある大型の冷蔵庫を指差した。

「いいの？　アルコール。それと、蓄財減るけど」

「バカ、そこまで攻め込むな」

ずつと笑顔が続いている。来て良かったと思った。

「おふくろに聞いたことあるんだけど、お前、高校も大学も出たんだろ？」

縁に座って呑み始めたたとんに訊かれた。ツマミはとりあえず買ってきたばかりのサキイカだ。

「うん、高校は女子高。男無しだった。父親がけっこ猫つ可愛がりしてくれてさ、その分、心配症でね」

「虫を心配するほど可愛かったのかよ」

「まさか、鬼も十八番茶も出花の類で十人並み」

「なるほど面影がある」

「何それ：大学は東京の女子大で、入りやすかった文学部」

「就職にはあんまり役立たない学部だ」

「そう。父親は職に就かせる気もなかったみたいね」

「深窓のご令嬢ってわけだ」

「やめてよ。分らないようにだけど不良やってた」

当時は干渉過多の養父母に嫌気がさしていた。

「看護師になりたかったのよ、ほんとうは」

「医学部はさすがに無理だと言われたわけか」

その点はいまも解からない。自分たちが看護や介護を受けるなんて想像もしていなかったのだろう。それでも自分も思い通りに進めないことで直接反発することはしなかった。実の子でもないのに愛情をいっぱい注いで育ててくれるのだから。

「でもいいよな、俺もあいつら三人も義務教育で終わりました。卒業するたびに親父が一人一人家を追い出しました。まるで野生の動物世界の話だ」

「なぜかな？　そういうところまるで理解できない」

「理由を知ると吐きそうになるぞ。いいなら生きているうちに伝えておきたい、何につけ真実はほとんど残酷なものだ」

少し怖いのが、六十五になったこともあり、自分の人

生をまとめるうえで必須のことだと思ひ、「わたしけつこう強いよ」と秘密の開示を促した。

「あの三人の中にも自分の子じゃない子がいる」

「えつ」と顔を上げ、目を剥いた。

「親父はそう思っていたのさ、おふくろを疑ってな」

「おかしいよ、疑うこと自体、猜疑心が異常だわ」

それが本当なら実父は自分自身にも、よその人妻との間に秘め事があったに違ひない。そう思った。

「悦子、お前がそうだったからだよ、おふくろは知られた恐ろしさに養女として遠縁にあたる和田さん夫婦にお前を売った」

「売った？ 人身売買なの？」

「ああ、親父も承知のうえだし、おふくろは金を受け取った。これはおふくろから直接聞いている」

手から力が抜けたのか、グラスが傾き、中のビールが垂れ落ちた。

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫なわけではないけど、続けて。まさか養親のふたりは知らないよね」

「知ってる。おふくろの浮気相手、つまり悦子、お前

の実の父親が和田さんの一族の人だから」

「ビール注いで、兄さん」とグラスを突き出した。自分の膝元が濡れたままで気持ち悪かった。

「あ、ああ、呑め、たっぷりと」と兄が応じた。

「種違いの兄妹かあ、でもきょうだいで良かった。今日来てそう思った」

「俺もだ。あいつらとは違う妹がいて救われたよ、気持ち的に。それに見れば確かに顔も体型もちがう。お前の方がずっと上だ、種が違えば当然そうなる」

ふと、気づいた。兄が独身を通して、しかも女すら知らないと言われているほどに女を避けている大本の理由は、母親や妹に対する嫌悪感かもしれない。

「注ぐよ、待ってる、俺も付き合おうからもう一缶ずつ持ってくる」

夜もアルコールを口にしたのに、床に就いても頭が回って目が冴え、なかなか眠りに入れなかった。

兄の話は今まで和田家で不思議だったことを氷解させた。養父が妻子のように可愛がつくれたのは一族の血統だからだろう。過干渉と言えるほど女子高、

女子大に拘ったのは、実母の情欲の遺伝を恐れたとも考えられる。養母、養父の順に他界したのだが、養父が遺言で土地家屋を実子の長男育志に、金銭の総てを養子の悦子にと指定したのは、もしかしたら養父はその経緯から悦子に一生分の慰謝料を払う感覚だったのではないか。養家を捨てやすくしたとも考えられる。現実に身軽になってすぐに飛び出た。あくまでも憶測だが、一つの浮気もたらした長期に亘る歪んだ人間模様、怒りや蔑みとは無縁の宿命みたいなものを感じた。

寝返りを打ったときに布団の端に唇が触れた。

「そういえばこれ、誰のための布団なの」

兄は別室でベッド上に布団を敷いて寝ているのだ。想像を膨らませれば面白そうだが止めた。朝を待つて、訊けば済むことなのだからと。

「兄さん、朝めしできたから」と、ノックもせず。パソコン部屋の戸を開けた。

「おう、バックアップしたらすぐ行く」

「八十でそんなにパソコンを駆使している人ってい

ないと思うけど、誰に習ったの」

ネット通販と聞いたときから訊こうと思つてた。画面を見れば利用は通販だけではないと判る。

「誰もいない。独学だ、中卒で家を出されてからずっと、何でも独学。だから人間が独善的。辻褄合うだろ」

独学と言われて机の横の本棚を凝視した。確かにハウツーものだらけだ。中でもパソコン自体、OS、アプリなどネット繋がりが多い。それだけ真剣に取り組んだのだろう。過疎集落で車もなく独りで暮らすためには必須のスキルだ。

「具は何だ、味噌汁」とまだ立たない。

「今朝は長ネギにワカメ。早く来る！」と睨んだ。独り暮らしが長いと相手に合わすことを忘れる。兄に限らず誰だつてそうだ。

第一回目の朝飯ということになる。炊いた銘柄米に味噌汁、まだ旬には早い白菜の漬物、出汁玉子、鰻の干物、小分けされた納豆を食卓に並べた。

「夢に見た景色だな」と兄は目をこすりながら言った、口許が嬉しそうにはころびている。

「でも納豆は悦子が食べろ、持病の関係で避けてる」

「うん、じゃあ、ずつとそうする」

「それはともかく、何だよ、可愛いエプロンなんて着けちゃって」

はにかんで「新妻の雰囲気」とつぶやいてみた。

「バカ、婆さんの歳で新妻はないだろ」と笑う兄に、何となく孤独感が漂う。

「ねえ、どっか行きたいところある？」

「そうだな、お前が居られるうちに、だよな。折角だから病院まで頼む、地域医療の要の公立病院だ」

「分かった。後で住所教えて、薬の小袋にあるでしょ？ カーナビに打ち込むから」

薬局は病院の近隣にあるはずだ。

「病院の領収書でいいだろ」

「そうか、で、何科なの診察科目」

本人の口から聞きたかった。

「内科と循環器外来と眼科の三か所。行けば大学病院に行くように強く言われるから嫌なんだけども、もうすぐ薬が切れるからしょうがない」

「いつもはどうやって通院してるの？」

「循環器が時間指定だからバスや電車じゃ無理、高い

けど往復両方でタクシー呼んでる。半年前までは三ヶ月に一度にでもらっていたんだけど、いまは毎月来いと強く言われてる」

掛かっている科目の何が重篤になったのかは姉たちの話で肝臓だと想像がつく。敢えて訊くのは止めた。大学病院に行けばきつと手術か入院になるのだろう。そう思っで見ると、兄の痩せ方は尋常ではない。

「時間かかるからお前、その間、観光でもしてるよ、周辺には名所もある」

「分かった、そうする、スマホ持つてる？」

「ガラケーだ、後で番号教えるからすぐに俺に電話してくれ、つまり俺が返信する形にしておきたい」

「はい、すべて了解、努めて明るい声で応じた。

待ち時間を利用して市役所福祉課の小松氏をアポ無しで尋ねよう。当日会えなくても伝言をメモした名刺を手渡してもらえよう課員に頼むことは出来る。そう決めて小さくうなずいた。

「悦子、意外にうまいんだな、料理」

「意外は要らない。ありがと。でもね、出汁玉子だけじゃあ料理とも言えないよ」

それでも兄の笑顔は嬉しかった。

市役所は病院の近くにあり、探す手間が省けた。

幸い小松氏は平職員ではなく役付なので福祉課の「上座」の方に座って居た。

「四人目の妹さん、そうですね、生まれてすぐに養女に」と彼は、自己紹介を終えたわたしに掌で椅子に腰かけるようにと伝えてきた。場所はロビーの二画で、周りに人はほとんどいない。

「こう言つては何ですが、お姉さんたちの反応には困惑していました。もちろんあなたを呼んで事情を告げてくれたことには感謝ですが」

真つ先に逢いに来ることになった経緯を伝えると強張っていた顔がようやく和らいできた。

「お忙しいでしょうから単刀直入にお訊きします、福祉課として私達姉妹に求めるものは何ですか」

「これは驚きました、飾らずに言えばですが、求めているのは私達ではありません。三澄篤孝さんのお兄さんの深刻な病状が求めているのです」

「それほど重篤だと？　いろいろ思っているようで

すがどの疾患が、ですか？」

「緑内障はかなり進んでいて放置すれば早晚失明、全盲も視野に入ってきます。肝臓癌の方はさらに切迫していてステージはすでに四、肺臓、リンパ節など多臓器に転移しているようです。残念ながら具体的な余命など本当の意味での病状は病院も伏せています。いわゆる平均余命なら四Bなので七カ月ですが彼は既に四カ月経過しています。この二つの他に高血圧症や糖尿病や前立腺肥大症があります。しかし、私たちが一番心配しているのはそれとは違つて、あの集落に独り住み隣人の出入りもほとんどないという三澄さんが心筋梗塞や脳梗塞を突如発症する可能性が高いということなんです、根拠は心房細動です」

「姉たちの説明では、引き取つて一緒に住んで欲しいと役所がしつこく…失礼」

係長は気を悪くするでもなく笑顔で頭を掻き、「ええ、かなり執拗に要請しました。身勝手を言いますが「ご容赦」と、姿勢を低くして上目遣いをした。

「なんでも、どうぞ。率直でないと言わざるを得ない状況が把握できませぬ」

「ああいう場所で八十歳のお兄さんに孤独死されては、老人福祉都市を標榜している当市としては大変困るのです、看板倒れになりますから。ですからお兄さん個人の安否だけの問題を超えているんです」

「これはまた真正直な」うっかり嘲笑った。同時に、もしかしたら彼は、故意にわたしを怒らせて、目標達成に繋げたいのかもしれない、と舌を巻いた。

「福祉課のモットーです」

そうなら係長の言質を盗って兄の最終段階の安全を確保しようと思った。

「安心しました」

意外にも彼は、「うん？」と言い、きよとんとした。

「兄に命の危機が来ても、それと知れば福祉課は、全力で兄の命を守ろうとする。そういうことになりますので。ありがとうございます」

「これは一本取られましたな。危機を私が知れば当然そうします。問題は危機自体が把握できない生活環境なんです、和田さん、なんとか一緒に住めないもんですかねえ」

できればそうしてあげたい。しかし親の介護、看護

も済み、配偶者もない今、残り少ない老後の期間を、出来れば自分のために遣いたい。だから賭けに等しい、青臭い理想に基づく福祉会社の設立に踏み切ったのだ。そして今日、明日にも最後の詰め連絡が来る。

「兄の家にかんりの頻度で訪れたり、電話で健康状態を確認したりは出来ず。でも同居は無理です。もうすぐ仮名刺どおり会社のオーナー兼CEOになるんです、それに、当分の間、東京の友人宅で八畳一間程度の部屋に住まいなんです」

「やはり難しいですか。ではお願いを変えましょう、三澄さん入院か県営の施設に移るよう説得してください。我々は何度も試みましたが、拒否されています。あなたが頼みの綱です、どうか宜しく。それと接触された時々の結果を是非ご連絡ください。必ず名刺にあるモバイルの方へ、ショートメールでも結構です。福祉課としてもこれからは、ご連絡の全てを和田さん宛てにします」

「ええ、それは承知いたしました」

「進んでお訪ねいただき、ありがとうございます」
「わたしこそ。引き続き兄のこと、宜しくお願いいた

します」ここは直角に腰を折って頭を下げた。

帰りの車の中での兄は雰囲気が一変していた。不機嫌とか、何かに怒りを感じているとか、そういう性質のものではなく、深い憂いを湛え、全身の力が抜けたような姿だった。病院の駐車場で乗せてから二十分程経っているが、話しかけても全く反応が無く、こちらも終には黙るしかなかった。病院内で一体何が起ったのか。道路の両側の景色が後ろに飛んでいく。それが自分の運転によるものであることさえ忘れて、わたしもまた不思議な感覚に支配されていた。

帰宅後の丸二日間、兄はほとんど喋らなかつた。私がつくる朝昼晩の三食には自室から出て比較的穏やかな顔つきで食事を共にしてくれたが、何をするためか、済めば直ぐに自室に戻った。別にわたしに何か気に入らないことがあるという訳ではなさそうで、呼びかけるたびに、「うん」と肯定したり、眼を細めてうなずいたりはしてくれる。不思議に思って、そつと部屋を覗いてみると、机に坐りパソコン操作に専念している。この長く物静かな時間が、逆に怖かつた。兄は

病院で何か決定的なことを言われたに違いない。もつとも確率が高いのは具体的な余命の告知だ。肝臓からあちこちに転移した癌細胞が彼の体に最後通牒を發したのだろう。会話をすればきつと、泣き言や愚痴の類を口にするにつながる、兄はそれを必死に回避しているのだ。そう思った。

「こんな情況下で東京から連絡が入ったらどうする？」ふと、不安が芽吹いた。

創業スタッフはいま、会社設立後すぐに協力先となる会社のトップにアポをとつてもいるのだ。ここに居続け資金を送つて済ますという訳にはいかない。

兄が急におでんが食べたいと言い出したので竹輪と卵しか具がないと残念な声を出すと、大根なら裏の畑にあるというので二人で裏庭に回つた。すぐに頭を畝から出した大根の葉を掴み、力一杯引くと簡単に折れてしまった。後ろで兄が「大根を跨いで葉っぱを束ねたら真つ直ぐ上に引け」と笑われた。笑顔は嬉しかったが、傾き始めた陽の光を受けた兄の顔がひどく青白い。少し黄ばんだ両目の周りに隈もある。今朝、食後すぐに

トイレに入り二十分ほど出てこなかったことも併せ考えると、体調がすこぶる悪いに違いない。

「兄さん、部屋で休んだら？ 辛いんでしょ」

「ああ、ちよつと心臓がな。ま、よくあることだ」とまた笑顔をつくった。

「晩ご飯出来たら呼ぶからとにかくベッドで…」

「うん、そうするか。そうだと悦子、お前に折り入って頼みがある」

「なに？ 何でも言つて」

「いや、後で言う。卵の鮮度が落ち始めたころだ、具が三つでもおでんは名案だろ？」

そう言つて体を反転するとき少しよろけた。

変だ。嫌な予感がした。福祉課長曰く、平均余命は七カ月だが兄はすでに四カ月経過していると。「それなのにここに居る」なぜそこまで意地を張るのか。強い言葉で諫めようかとも思うが、昨日今日の妹にそれができるはずもない。一度でも彼の閥値を超えれば兄妹の縁まで終わってしまうだろう。そう思った。

家事をしても肌身離さず持っていたスマホが鳴った。「まさか」という暗い想いが襲つてきた。

「はい、ワダエツ。アポ、決まったの？」

電話は設立後に専務にする予定の村上だった。「明後日十時にファーストフードフランチャイズの社長に会つて、話が決まったら即現金が必要になりますから、それに間に合うように戻つてくください」昂奮しているらしく声の上擦っている。

「分かった。お疲れさま」返事は短くていい仲だ。

電話を切つてから、空を見上げて唸つた。明日ここを発つ。何もしないでいいのだろうか。何かあつたら必ず連絡をと別れ際に小松福祉係長が放つた言葉を思い出したので、すぐさま実行に移した。得手勝手な頼み事だとは思うが他に安心できる手立てはない。

事情を告げると係長は「まづいな、でも和田さんが三日で一旦戻れるというなら、部下に看護師資格がある子がいる。夜は無理だが日帰り勤務で特別に派遣する」と配慮してくれた。

その夜、夕食という会話の機会にも兄は「頼み事」を口にせず、「俺、今日の風呂はいいから」と右側の腹を押さへながら部屋に戻つてしまった。片付けものをした後で兄の部屋を覗き机に向かう無事な姿を確認してから風

呂場に入った。まだ来てから一週間も経っていないのに重さのある長い時間が経ったような気がした。

髪を洗うなど十分ぐらいして湯船に浸かったとき、目の前の引き戸が開いて兄が顔を出し、痛そうな顔をして柱に背中をつけたまま滑るようにして敷居に腰を落とした。

「救急車呼ぶ？ 辛そうだね」

客観的にみればかなり妙な凶柄の中に兄妹が居る。

「裸が見たい、びつくりさせて悪いが、これが死神に呼ばれた俺の頼みごとだ」

眼が冗談や酔狂で言っただけと訴えている。兄妹ならば普通、成長過程で何度も互いの裸は見ているものだし、どうということはない。だから嫌とか破廉恥とかそういうことではない。まさか自殺する気なのか？ きっと病院で具体的な余命を、いや致命的な所見を貰ったのだ。明日自分は東京へ戻る。どうする？ 小さな混乱は兄には躊躇いと映るに違いないが…。

「こんな時代だから二次元の裸体は氾濫してる。俺は三次元の女を見たことがないんだ。つまらないことかもしれないが潤いの無い俺の人生の総ての象徴だ」

「兄さん、わたしお婆さんだよ、いいの？」 努めて微笑みをつくった。真顔が毒になる台詞だから。

「お前は明るくて、優しくて温かい。そういう悦子だから体が見たいんだ、それで一度俺の心を浄化したい」

うっかり涙が出そうになった。哀しいとは違う。可哀想とも違う。兄の今にも死にそうな横顔がなぜか美しいように見える。静かにゆつくりと立ち上がった。

「兄さん、これでいい？」

きちんとこちらを見た兄の眼が涙に濡れていた。

「やつぱりきれいだ、ありがとな。もういいよ、風邪をひくぞ」

「うん」と後ろ向きになって湯船に沈んだ。三次元ならそれも要るだろうと。

「悦子、俺のこの肩甲骨の上の火傷の痕見てみる」

視線を兄に戻すと、パジャマの片肌を脱いだ後姿があった。皮膚が変色している古い傷跡だがはつきりとした舟形をしている。

「まさかアイロン火傷？」 恐ろしい勘繰りを口にした。

「ああ、小学三年だった、そばでアイロン掛けを見てたら突然襲われてな、後で親父が呼んだ医者には事故だった

てあいつ、嘘つきやがって」

「信じてたのかな、医者は」

「まさか、疑ったさ。親父もな。当時はこんな言葉知らなかつたけどな、どいつもこいつもだ。特に親父は自分の代わりに息子の俺が犠牲になったと感づいたろ」

そんな夫婦なのに兄のあとに実母は四人も女の子を孕んでいる。一体子どもが産まれることの意味は何なのだろう。そんな夫婦だから疑惑の色濃い余分な子を他家に売った。兄は自分の傷と同じものを抱えた妹だから本来隠すべきことのすべてを告げてきたのかもしいれない。

「悪い、のぼせちゃうな、もう寝る」と兄が立った。

「大丈夫？ ベッドまで支えようか」

「バカ、素っ裸でか？ 何かヘンだろ、それ」

二人して同時に笑った。

村上と当日營業的にやるべきことを済ませた後、久しぶりに近くの日比谷公園に立ち寄った。あとは明日彼と銀行に行けば切迫した用事は終わる。

昨日兄は玄關先まで見送りに来て、自然な形でハグをして来た。嬉しかったので力一杯抱きしめて応じた。

「戻れよな、悦子」

「兄さんこそ、留守中に他の国へなんか行くなよな」

「何か意味があるのか、俺が生きてるってことに」

「意味があるから生きてるんじゃないかって、生きてることの意味があるんだよ、わたしが兄さんの精一杯の生き様を見てあげろ」

泣いているのか、兄の体が小刻みに震えていた。抱き合つたままの奇妙な会話だった。

スマホの音に呼ばれて「はい、和田です」と出た。

「小松です。先ほど三澄さんの死亡が確認されました。心不全です、部下の加藤が除細動器や人工呼吸で戻して救急車にもつないだんですが着いた救急病院で、力及ばずで、すみませんでした。加藤が言うには最初に意識が戻った際に聞いた言葉は、生きたい、だったそうです」

生きたいって言ってくれたんだ。涙が噴き出た。

「もしもし、明日戻れますか？」

応えたくても声が出なかった。

(完)